へ13
3706
7

門へ13
號3706
巻7

薄傳

為永花の上

園の春

支考の十論ふ文章を評しく。譬ば艶冏の千束あるも思ふ事いふ字の外いなしく只思ふ〜と許り。百枚書くとも人の心は一毫動くまじきを。浅芽ダ宿ふ立忍び。雲井の余所ふ思ひ動くに言葉のいやふ。浅芽も雲井も何用ありや。

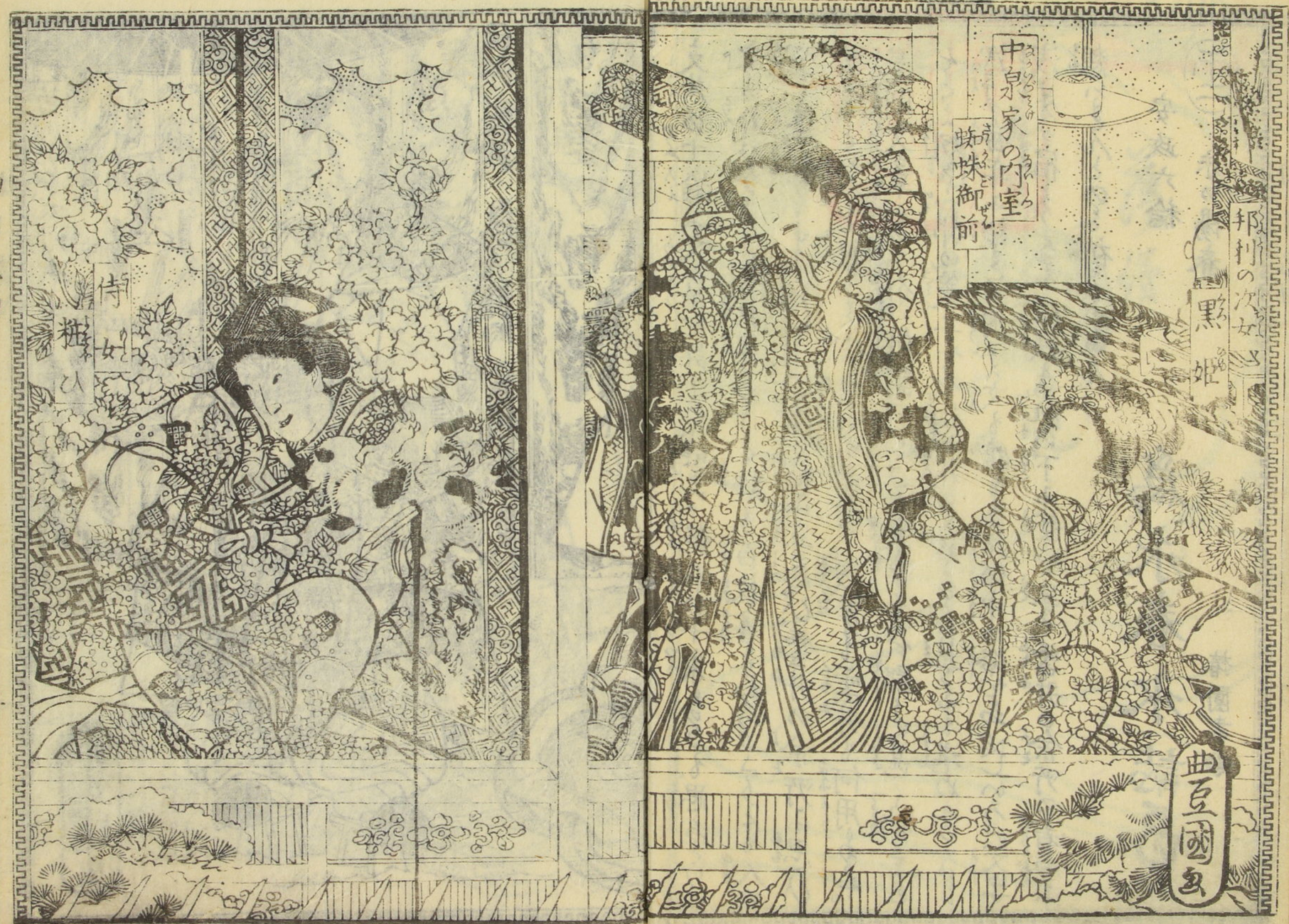
三則文章
ことに知る一部の策子なり。詞ふ花のあやもあぶ見るまも堪ぬ。のみならず
沈み毎年ふ絞まる冊子ふ文も雅もあれ俗中の俗なるべしいろは文字

浅芽ダ宿ふるや住狭き机の下ふ筆を立く。雲井の余所の看官ふ想ふまんとのこ祈るふもん。

安政六稔
赤の陽春

為永春水誌

椿園書


邦利の次女
黙姫
中泉家の内室
蛛蛛御前
侍女
粧人
曲亭馬琴

菊川小平太
貞住
侍女
源見
菊の
曲亭画

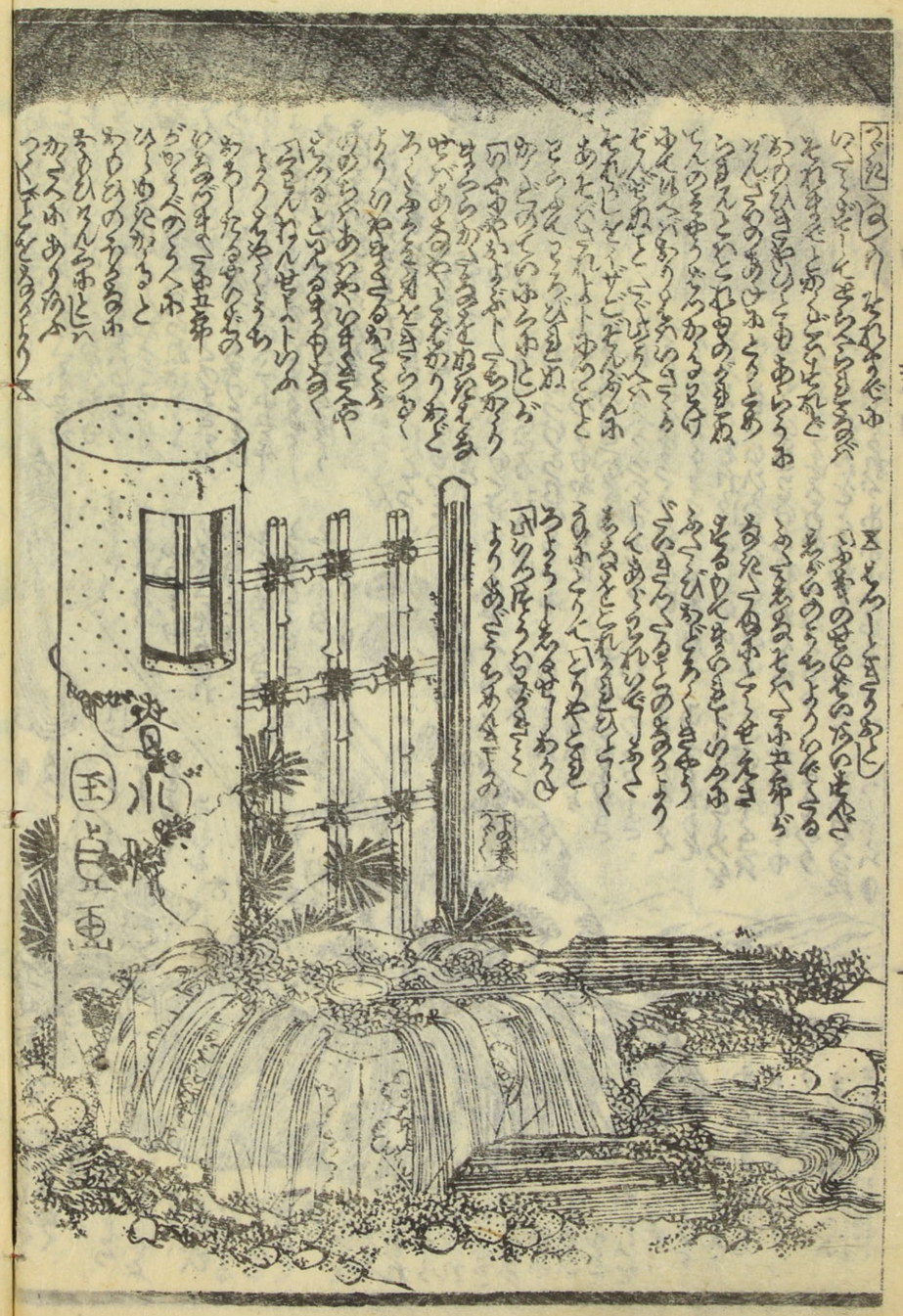
武
小
谷

谷

谷
折

深
谷

邦
架
谷



實母散

柳蔭月朝素　山々亭有人作
丸屋辺　梅朝楼國貞画

藪黄鶯八幡不知　山々亭有人作
錦朝楼芳幸画